

平成滑稽（一）

有富洋二

平成は色のない時代ともいえる。明治や昭和には、はっきりとしたイメージが残るが、平成にはそこまでのものはない。甚大な災害などが頻発したが、災害は残念ながらどの時代にも避けられないものであった。私が平成の文字を初めて見たのは、とある昼下がり、友人の運転する車の助手席のテレビ画面だった。「平成」は、太い縁メガネの官房長官の持ち上げた額の中にあっただ。三十代半ばの私は、まだ俳句には縁がなかった。

あれから、あつという間の三十年。昭和歌謡は忘れられない良い歌をたくさん残したが、それらを糧に、時代に合った歌が平成に残された。俳句もしかり、前の時代を糧にそれぞれの時代に合った句が詠まれる。たかだか句歴十数年の私にとっても芭蕉、子規のインパクトは大きい。♪芭蕉は侘び寂び～ 子規の写生～ 健さんは滑稽～♪ リズムよろしく韻を踏みつつ、俳句という人生の伴侶と暮らしている私は、平成も楽しく同志たちと歌っていた。

この平成時代には、滑稽俳句という文芸復興があった。その滑稽宣言は際立つ色で記憶されるに違いない。あえて滑稽俳句と名乗ることは勇気がいる。たまたま滑稽エリアに降り立つのと滑稽エリアを目指すのでは、覚悟が違うからである。例えば、古今集に俳諧歌として収められた「山吹の花色衣ぬしやたれ間へどこたへず口なしにして」以下五十八首などは、特に意図されたものではなく、既に詠まれたものからのジャンル分けにしか過ぎない。

いずれにしても、俳句は、古代万葉集の戯咲歌、嗤歌から室町時代の『竹馬狂吟集』、『犬筑波集』などをはじめ、およそ千三百年にわたる歴史を歩んできた。古代の掛け合いから平安時代の言葉遊び、連歌の成立、鎌倉、室町時代の俳諧、そして江戸時代から現代へと変革を求める庶民のエネルギーによって成されたものを一本の巻物にしてその歴史を語る事ができる。その俳句から俳味とい

う味付けを退けようとしようが、取り込もうとしようが、俳味の支配下にあるということは揺るぎない事実である。

ただ、平成の滑稽はそれらの上に乗っかってはいるが、バランスを崩せばたちまち滑落してしまう危うさも感じるころである。だからこそ皆真摯に取り組み続けているわけでもある。生まれるべくして生まれた平成の滑稽俳句。これだけの多くの人たちが入魂した平成滑稽の心は、かかる時代の財産であり、次の時代を歩き始めるための助けとなるだろう。

また、今なお滑稽というと一段低く見られる傾きのあるのも確かだが、それは本当にそうであるかどうか、根気よく問い続けて行かなければならない。笑いの効用については万人が認めるころである。笑いはタダである。少なくとも損をするほどのものでもない。とても合理的なものである。物事の別の見方を探す手段になり、今の常識を疑い、時には常識を変えるものにもなる。正論を笑い、生き方をも変えるほどの力があり、生き抜く知恵にもなる。

熱爛や討入りおりた者同士	川崎展宏
階段が無くて海鼠の日暮かな	橋 閒石
峠路を行かばこのまま雪をんな	野澤節子